

『光輪』より

28 三願転入がんでんにゆう

祖師そし聖人しょうにんは化土けどのまき卷に、十方衆生ほうしゅじょうの入信にゅうしんの道程どうていを三願転入がんでんにゆうを以て指示しじしていらるる。

「愚禿ぐとく釈しゃくの鸞らん、論主ろんじゆの解義げぎを仰あおぎ、宗師しゅうしの勸化かんけによりて、久ひさしく万行まんぎやう諸善しよぜんの仮門けもんを出いで、永ながく双樹林下そうじゆりんげの往生おうじやうを離はなる、善本徳本ぜんぽんとくほんの真門しんもんに廻入えにゆうして、ひとへに難思往生なんしおうじやうの心しんを発おこし、しかるに今いまことに方便ほうべんの真門しんもんを出いでて、選択せんじやくの願海がんかいに転入てんにゆうせり、すみやかに難思往生なんしおうじやうの心しんを離はなれて、難思議往生なんしぎおうじやうを遂とげんと欲ほつす、果遂かすいの誓ちかいまことに由ゆえあるかな、ここに久ひさしく願海がんかいに入りて深ふかく仏恩ぶつとんを知しれり、至徳しとくを報謝ほうしゃせんがために、真宗しんしゅうの簡要かんようを摭ひろうて恒常ごうじやうに不可思議ふかしぎの徳海とくかいを称念しょうねんす。いよいよこれを喜愛きあいし、ことにこれを頂戴ちやうだいするなり」と。

然るに浄土真宗に流れを汲む道俗は他力廻向の言葉に誤魔化されて実地の求道を忘れ、唯観念の遊戯に終って、他力が無力に成っている。

私が総会所で布教している時、雲山和上が度々参詣されて、「大沼さんあんたの布教は説教ではないね」「何ですか」「御示談だ、人の聞きたいと思う処を自分で

自問自答しているのだ」「そうですか」「時に大沼さん私が本山で昨日説教した時、

今総会所で大沼が説教しているが、あれは腰を据えて聞かねば判らんぞ、第十八願を向うに眺めて丸々他力の丸ごかしにしない、唯になるまで実地に求めよと、三願転入の腹で説教しているから、その積りで聞かないと味がとれないぞと、言っとききました」「有難う御座います」

法龍の腹は定散の自心に迷うて金剛の真心に昏い第二十願の法頓根漸の自惚道俗に対して真仮の分際を明瞭に説示しようと努力しているのだ。無帰命安心に成っているのが

可愛相だから機受の信相を明らかにして上げるのだ。

死後の往生のみを夢見ているから

現生不退の有ることを教えて上げているのだ。観念の遊戯ばかりしているから実機が流転す

るぞと突いて上げるのだ。

三経、七祖、祖師の著述が 皆三願転入の意味で 真仮の分際を鮮やかに説いて有るのに

頭だけは第十八願の積りで自惚れているが、 腹は第二十願の入り口に立っているのだ。

真仏土巻に

既に以て真仮皆是れ大悲の願海に酬報せり 乃至 真仮を知らざるに由て如来広大の恩徳

を迷失す

和讃に

念仏成仏これ真宗

万行諸善これ仮門

権実真仮をわかずして

自然の浄土をえぞしらぬ

この念仏成仏これ真宗の中に、死後に眺めた第二十願の念仏と、仏智満入で諦得した第十八願の念仏の有る事を知らないから 他力不思議の境地が受取れないのだ。 仏智の仕組が方便より真実に誘引しようとしてあるのに、道俗は自惚れて、すんだ積りで堕ちて行くのだ。

僧侶よ、学問も必要だが実地の体験は猶必要だ。 七里和上は学問は槍の柄、信仰は穂先と言っているが、私は学問は定規、信仰は剃刀と言う。 布教使も左の図面を諦得して同行がどの程度にいるかを注意して布教しなさいよ、効果が挙がるから。

三願

三經

三藏

三門

三機

三往生

第十九願

觀經

福德藏

要門

邪定聚

双樹林下往生

第二十願

小經

功德藏

真門

不定聚

難思往生

第十八願

大經だいぎょう

福智藏ふくちぞう

弘願ぐがん

正定聚しょうじょうしゆ

難思議往生なんしぎおうじょう

これを六三分別ふんべつと言いつて浄土真宗じょうどしんしゅうの綱格こうかくをなすものだ。実地じつちに求道きゅうどうして行く時とき

第十九願

要門ようもん――

邪定聚じゃじょうじゆ

法ほうが自力じりき

機きが自力じりき（法機俱漸ほうきぐぜん）

雜行ぞうぎよう

修諸功德しゆしよくどく

至心ししん発願ほつがん

大衆たいしゅう圍繞いによう

三不さんぷ――因いん

第二十願

真門しんもん――

不定聚ふじょうじゆ

化土往生けどおうじょう――果か

法ほうが他た力りき

機きが自じ力りき
(法ほう頓とん根こん漸ぜん)

雜ざつ修しゆ

植じき諸しよ徳とく本ほん

至し心しん廻え向こう

不ふ果か遂すい者しや

第十八願

信しん後ご

一いち念ねんの信しん

信しん前ぜん

自じ力りきの心こころ
(疑ぎ)

弘ぐ願がん— 正しやう定じやう聚じゆ

法ほうが他た力りき

機きが他た力りき
(法ほう機き俱く頓とん)

專せん修じゆ

三さん信しん— 因いん

乃ない至し十じゅう念ねん

至し心しん信しん樂ぎやう

若にやく不く生ふしやう者じや

報ほう土ど往おう生じやう— 果か

後の図に依つて説明すれば第十九願の開設が觀無量寿經、これを善導大師は要門と教え、

要は肝要、要、八万の法蔵は 觀無量寿の觀の一字に納まる肝要、 門は通入の義で出入が

出来る、 門を出れば六度万行となり八万の法蔵となる、 門に入れば定散二善から念仏

一行に通ずるのである。

願文には法を修諸功德と説き、機を至心発願と教え、諸々の功德を拡ぐれば諸善万行と

なり、此の中に万行随一の念仏も納まる。この自力の善根を策励して至心に発願して往生

を願うから法機俱に自力であり、漸進しか出来ないから 法機俱漸と言ひ、利益としては

大衆に圍繞せらるるけれども、聖人はこの桁の人達を邪見が去らないから邪定聚の機と教

え、修相しゅうそうは如実にょじつでないから、結果けっかとしては 仏ぶつの入滅にゅうめつを見る双樹林下そうじゅりんげの化土往生けどおうじょうを得るの
ある。此この桁けたの人達ひとたちは、善根功德ぜんこんくどくを修しゅうしていると思おもっているけれども、浄土往生じょうどおうじょうの資助しじよに使
うから 之これを第十八願だいじゅうはちがんから見て雑行ざうぎようを雑修ざつしゅうしていると選捨せんしやするのである。

(註) かなりの学者がくしゃでも雑行ざうぎよう雑修ざつしゅうの事ことを 神道しんとうの祈り祈祷いの ぎとうをしたり、御札おふだや御籤みくじなどを
貰もらう事ことを雑行ざうぎよう雑修ざつしゅうと説明せつめいしているが、それは絶対ぜったいに誤りである。あれらは神道しんとうの行事ぎやうじであつ
て当宗とうしゅうから彼是かれこれ言うべき筋合すじあいのものでない。雑行ざうぎよう雑修ざつしゅうとは当宗内とうしゅうないの善根功德ぜんこんくどくを踏ふみ台だいに
して往生おうじょうを願ねがう物柄ものがらを雑行ざうぎようと言いい、念仏修ねんぶつしゅうする修相しゅうそうについて機執きしゅうが去さらないで、助正じょしやうをなら
べて往生おうじょうの助たすけにするのを 雑修ざつしゅうと言いうのだ。

合点がってんで通とおつてはいけない。實際じっさいに修しゅうしてみよ。弘法大師こうぼうだいしの所謂いわゆる 「名利めいりの為ために千金せんきんを投出なげだ
すは鬚ひげを撫なでるよりも易やすく、慈悲じひの為ために一銭投出いっせんなげだすは生爪なまづめを抜ぬくよりも難むずかしい」の言葉ことばの如ごと
く、實際じっさい、名誉めいよを得うる為ためか、利益りえきを得うる為ためには 湯水ゆみずのように使つかいながら、慈悲じひの涙なみだは注そそが

ない、善根を積まずに果報の来る筈がない。失敗だらけに気がついた時、自力の善根ではない、立派な証果は得られないと気がついた時、第二十願の門に入るのである。

第二十願の開闢が阿弥陀経、この意味を善導大師は真門と教え、真は真実と続く字であるけれども、まだ機執が去らないから、法の真実の真を取って、機の未熟を顕して実と言わないのだ。門は通入の義で要門より漸進して弘願に通入せしめようとの思召しから真門と言ったのだ。

願文には法を植諸徳本と説き、機を至心廻向と教え、諸々の徳の根本を植える。聖人

は善本徳本は弥陀の名号なりと仰せられてあるが、善本徳本の名号を修習しながら機功を募るから折角の他力廻向の名号も至心に廻向する自力廻向の桁に墮ちるのである。

だから法は他力で、機は自力の法頓根漸であり、利益としては第十八願の境地まで果遂せ

しめずには置かない徳は有るけれども、修相のいかんによつて往生の定不を決めようとして
いるから 不定聚の機と言ひ、結果としては難思往生の化土往生を得るのである。 第十九
願の邪定聚の機の双樹林下の往生に較ぶれば勝れているから難思の二字が与えてあるけれど
も、第十八願の正定聚の機の難思議往生に較ぶれば程度が低いから議の一字を欠くのであ
る。この桁の人達は万行超過の名号に眼は注いでいるけれども、前三後一の助業を以て
往生の資助とするから名号特異の腕を發揮せず、雑修となり、又専修も桁を落として五専各
修となり、機功を募るから憍慢となり、機執が捨たらないから自力の心と教えたのである。
この自力の心の有る間は仏力に乗托していない、信順していないのだから疑いの心と言つた
のである。

だから蓮師の「もろもろの雑行雑修自力の心を振り捨てて」と仰せられたのは、
浄土門内の第十九、第二十の観小両経の桁を離れて第十八の大経に入れ、これ方便より

眞実しんじつに歸きせしむる果遂かすいの願功がんこうである。だから三願さん転入てんにゅうをしない者ものはいないのだ。自分じぶんは一度いちどで第十八願だいじゅうはちがんに歸入きにゅうしたと思おもっている者ものは憍慢きょうまんの自惚うぬぼれなのだ。

第十八願だいじゅうはちがんの開設かいせつが大無量寿經だいむりょうじゅきやう、これを善導大師ぜんどうだいしは弘願ぐがんと教おしえ、十方衆生ぼうしゆじやうびやうじやう平等しやうかうの証果しやうかうを得るから弘ひろい願がんと言いわれたのである。果遂かすいの誓ちかいによつて漸進ぜんしんした機類きるいは仏智不思議ぶつちふしぎによつて自力淨尽じりきじやうじんし、一念いちねんの信しんを諦得たいとくし信前信後しんぜんしんごの水際鮮やかみずぎわあざに、ここに唯信独達ゆいしんどくたつの法門ほうもんを發揮はつきすることが出来るのである。

願文がんもんには、第十九だいじゅう、第二十だいじとの行前信後ぎやうぜんしんごなるに異ことなり信前行後しんぜんぎやうごである。機きは至心信樂ししんしんぎやうおのれ、己きを忘わすれた他力たうりきの無我むがであり、法ほうは乃至十念ないうしねんで他力廻向たうりきえきやうの名号なごうが徹底てつていして信海流出しんかいりしゆつの称名しょうみやうとなつたものである。法ほうも他力たうりき、機きも他力たうりき、法ほうも本願名号ほんがんみやうご正定業しやうじやうごう、機きも決定往生けつじやうおうじやうしやうじやうの正定聚しやうじやうじゆ機法俱頓きほうくどんの絶对他力ぜつたいたうりき、これを一向専修いこうせんじゆの行者ぎやうじやと言いい、利益りやくとしては若不生者にやくふしやうじや、報土往生ほうどおうじやうじやうたが疑ぎいなし、これを難思議往生なんしぎおうじやうと言いつたのだ。これを正信偈しやうしんげの道綽章どうしやくしやうには

三不三信誨慙

と言いい、源信章げんしんしょうには

専せん雑ぞう執しゅう心しん判はん浅せん深じん

報ほう化け二ど土しやう正べん弁りゅう立う

と仰おほせられてあるが、真宗しんしゅうの道俗どうぞくよ、自惚うぬぼれが強いのだ、他力たうりきが無む力りきに成なっているのだ。其その儘ままが我儘わがままになり、唯ただが槍放やりつばなしに成なっているのだ。易やすい易やすいで誤魔化ごまかされなさんな。合点がってんなら易やすいが実地じつちとなれば難むずかしい。而しかし苦く拔ぬけした後は易やすいと言いう言葉ことばまでいらぬ易やすさだ。

真宗しんしゅうの人々ひとびとよ 根本こんぽんから間違まちがっていないか、基礎きそに狂くるいが有あるから、完成かんせいしないのだ。聖しょう

道門どうもんは易信いしん難行なんぎやうであり、浄土門じやうどもんは難信なんしん易行いぎやうが宗しゅうの据すわりだ。難信なんしん難行なんぎやうの宗旨しゅうしもなければ易信いしん易行いぎやうの教おしえもないのだ。

君達きみたちは聖人様しやうにんさまの御苦勞ごくろうの話を聞きいて 法ほうを死し後ごに眺ながめているのだから糠喜ぬかよろこびだ。観念かんねんの

遊戯に終つて生活とは何等交渉を持たないのだ。表看板は立派に真俗二諦、現当二世なんて掲げているけれども、真諦門が徹底していないから俗諦門がわやだ。此世はどうもなれないのだ、死にさえすれば五十二段なぞと、とぼけるな、因果が矛盾している。現当二世に
ならないではないか。

真諦門とは精神的の満足であり、俗諦門とは肉体的の活動である。精神を離れて肉体がなく、肉体を離れて精神がない。信仰を離れた生活もなく、生活を離れた信仰もない。清く正しく進め。宿業宿業と言つてずるけてはならないぞ。

今日のこの日は再び来ないのだ。人生受生の甲斐が有ったか。世間の人様の御恩に報いたか。そんなすさんだ生活で仏様に申訳が有るか。

十方法界我物なり。感謝の言葉も南無阿弥陀仏。懺悔の言葉も南無阿弥陀仏。